

書評

吉松覚

『生の力を別の仕方でも思考すること』

——ジャック・デリダにおける生死の問題』

法政大学出版局、2021年

濱田 明日郎

はじめに

ここに書かれるのは、吉松覚『生の力を別の仕方でも思考すること——ジャック・デリダにおける生死の問題』（2021）というデリダ論の書評だ¹。書評や紹介は解釈および読解なくしてありえないから、ここに書かれるのは読解の読解である。そのような「書評」は哲学史研究の場においても慣例的に行われるが、デリダの場合には独特の緊張が伴う。デリダその人の著作の殆どが、何かの注釈・解釈という仕方でも書かれたのであり、またその仕方が、彼自身の哲学の方法に本質的なものだった。この前提を無視するのでないならば、彼のテキストを読むわれわれの読解もまた、哲学者が実践し解釈者が伴走したテキスト＝生のなまなましい運動に、つねにすでに巻き込まれているのでなければならない。

同時代的な情勢を確認しておく。本邦の出版状況を眺めるとき、哲学史研究としてのデリダ研究が盛況である、と誰もが思うだろう。まず翻訳だが、デリダの講義録のフランスでの出版を受けて、『ハイデガー——存在の問いと歴史』（2020、亀井大輔ほか訳）等の講義録の翻訳の数々が近年出版されている。さらに亀井大輔『デリダ——歴史の思考』（2019）および宮崎裕助『ジャック・デリダ——死後の生を与える』（2020）。デリダ受容の第一世代からはまた一つ世代の下った研究者らによる、優れたモノグラフである。さらに若い世代の研究として、前期に時期を画定し、その時期のデリダを「展開史」という方法のもとに詳細に論じる松田智裕『弁証法、戦争、解読——前期デリダ思想の展開史』（2020）も登場したばかりだ。さて、われわれの著者はどのような研究方針を取るか。彼の研究は、2019年に出版されたばかりの講義録（著者はパリ西大学での留学中、その草稿にアクセスしていたという）が主題化した「生死」という主題のもとでデリダの著作を横断的に理解するというものである。とはいえ、われわれの著者の記述の意義は、ある時期の講義を題材に、周辺的な論点を落穂拾い的に紹介することにあるのではない。「生死」という彼の研究テーマは、デリダ晩年の発言

1 以下、同著の引用は頁数のみによって行う。

までをカバーする長い射程を持つのだ。要するに、『生の力を別の仕方でも思考すること——ジャック・デリダにおける生死の問題』は、その副題が示すように、豊富な論点を展開しうる「生死」という主題を掲げたデリダ研究の書である。

「生死」という主題の意味するところ

まずは「生死」という主題の含意を、著者の記述（126-127頁）の要約によって、簡単に展開しておこう。ことは『生死』講義の成立に関わる。デリダは1975-1976年の講義として「*la vie et la mort*」、「生と死」というテーマでの講演を依頼された。デリダは与えられたこのタイトルに対して、微細だが重要な変更を加える。「と」を除くのだ。そうして「*la vie la mort*」、「生死」と訳されるどころの題目が現れる。なぜこのような操作が必要だったのか。「と」に問題があるからだ。「と」の問題とはなにか。デリダのこの操作の背後には、生と死をそれぞれに外在的に併置することがあってはならない、という主張がある。そしてここにデリダに固有の「生」の問題がある。

この問いの固有性を理解するために、われわれはデリダに対する見易い対照項としてドゥルーズを置くことができるだろう。たとえば宮崎 [2020] は、デリダとドゥルーズの最晩年のことばをそれぞれ解釈しつつ、両者がともに生の絶対的な肯定に境位するが、アプローチは各々異なっている、という。曰く、「[……] デリダは、ドゥルーズのように生と死の分割以前の直接性を垣間見ようとするのではない。そこで語られていたのは、生／死の対立の複雑化＝錯綜（*complication*）としてみられた生き延び（*survie*）としての生のあり方である」²。デリダとドゥルーズの対照を際立たせるため、われわれとしてはさらにこう定式化してみたい。デリダにおいては、いわば生に内在する死が問題となるのだと。著者が取り扱う自己免疫性（第二部第五章）、すなわち自らを守る機構が逆説的にも自らに対する攻撃になるという事態もまた、この観点から問題になるといってよいだろう。生は死という契機を媒介してこそのものである。ここでは、「生」ないし「生死」（4頁）「生命、ないし生死」（107頁）という等置を文字通りに受け取るとき、はじめて生の問題が直視されることになる。たとえばスピノザにおいて自殺は必ずや他殺であり³、ベルクソンにおいて死という契機はスキップされ、直接に「生」あるいは「死後生」が問題となったわけだが、こうした〈内在〉の哲学史に連なる哲学者たちと比較する際、デリダの「生死」への境位は際立ったものであろう。

さて、「生死」という主題そのものがメタメッセージとして持つはずの主張を展開してきたが、われわれはすでにこのような結論的な著述の限界を感じる。「生死」という語で名指したい事態を表現するために、われわれは生と死の「混淆」（3頁）とか、「生

2 宮崎裕助『ジャック・デリダ——死後の生を与える』、岩波書店、2020年、242頁。

3 『エチカ』第4部定理20備考を参照。

の要素と死の要素が絡み合う」(6頁)とかと言う。単なる二項関係ではないことを言いたい言説そのものが、その二項を持ち出し、結果的に二元論的な景色を想起させる。結果として、その対立関係の調停としてのホメオスタティックな「均衡」のような理想状態を想起させてしまうこともあるだろう(97頁)。二項対立とその「均衡」という見通しは、むしろ著者が「拮抗」(*ibid.*)と呼ぶ緊張関係を取り逃がす。デリダが「生死」ということで述べたかったことは、要約するに安易な事情ではないのだ。吉松氏の読解に訪ねる時である。

著作の全体像

われわれはごく限定的な観点からこの著作を扱うが、その正当化のためにもまずはこの著作の全体像を俯瞰する必要がある。本著は第一部と第二部からなる。第一部が扱うデリダのテキストは、1967年の『エクリチュールと差異』所収の「フロイトとエクリチュールの舞台」、1975-1976年の『生死』講義(全14回)、そしてその内容を一部取り出し改稿した『絵葉書』(1980)所収の「思弁する——フロイトについて／フロイトを超えて」である。本著第一部第一章では「フロイトとエクリチュールの舞台」が、第二章では「生死」講義第4-6回におけるフランソワ・ジャコブ『生物の論理』読解が、第三章では「生死」講義第11-14回の内容が改稿された「思弁する」が、それぞれ「生死」を主題としたデリダの思索として検討される。そして第二部では第一部の内容を前提に、この「生死」の主題の1980年以降の展開が見出される。具体的には、第二部第四章でベンヤミン論「バベルの塔」(1989、『プシュケー-I』所収)、『法の力』(1993)読解、第五章では『信と知』(2001)・『ならず者たち』(2003)などの読解が行われる。

本稿では紙幅の都合により第一部だけを主に扱おう。すでに第二部に着目した書評が発表されているということもある⁴が、第二部は第一部で追求される「生死」概念の「展開」として位置付けられるという点で、「「生死」概念の形成」という名を冠する第一部を自らの原理とするものであり、そして同著第一部がデリダのテキストから凝縮された形で引き出す哲学的成果は、それ自体、紙幅を割いて検討するに値するものだと評者の目には映るからである。さてその第一部であるが、構成はフロイト解釈(1967)→フランソワ・ジャコブ解釈(1975-1976)→フロイト解釈(1980)という編年体を取る。しかしわれわれとしては、第一部第二章の紹介から敢えて始めてみたい。そこでは、最も強固に同一性が支配すると思える遺伝という事象において、それ自体テキストであるような生命が必ずや差異をはらむ仕方ですらを展開するという、エクリチュールの哲学者こそが語りうる生命論が提示されている。こうした第二章のデリ

4 廣瀬浩司「デリダの遺産を継承すること」、『読書人WEB』(<https://dokushojin.com/review.html?id=8143>)、読書人、2021年、最終閲覧日2022年2月2日。

ダ・ジャコブ読解から「外部へと開かれを伴いながら同じものであり続ける生命の運動」(107頁)という生命の原理を取り出したのち、その開かれの具体相を、第一章・第三章で行われるデリダ・フロイト読解における欲動論やエネルギー論に顕著な「諸力の拮抗」に見出していこうというのである。

一方通行的モデルから入れ子状のモデルへ。第一部第二章のデリダ・ジャコブ論

先ずは生命に対する先行了解を共有するところからはじめたい。複雑を極めるわれわれの生体の組成は、遺伝子にプログラムされている、前もって書き込まれている(それは pro-gramme である)。プログラムを組むのは、DNA の二本鎖を橋渡しする四つの塩基だ(周知のようにそれは ATCG という四つのアルファベットにより表現される)。そして遺伝情報というメッセージは、DNA の転写に関わる特定の分子の相互作用=コミュニケーションによって伝達されてゆく。ノーベル・ホルダーの遺伝学者フランソワ・ジャコブは、一般向け著作の『生物の論理』(1970)にて生物の読解を提示してみせたのであるが、このような生命の理解は何らかの仕方で現代のわれわれの常識を構成しているものでもあろう。

デリダはこのような「読解」を脱構築する。遺伝子というテキストをモデルとして、生物個体が成立している、とわれわれは考える。さらに、生殖という事態は、遺伝子というテキストを転写していくプロセスである、と考える(分子生物学を少しでも知るのであれば、この「転写」というテキスト的な比喩には聞き覚えがあるだろう)。しかし、このように「テキスト」を「モデル」とする生命論は、奇妙なアポリアに陥る。遺伝子をテキストとして読解する科学的テキスト(生物学の論文など)という審級を考慮するとき、「テキストは生命と科学ないしは科学者をつなぐ第三項という役割ではなくなる、すなわちテキストをモデルとして考えることはできなくなる」(86-87頁)。どういうことか。「モデル」とは、ある二項を取り持ち、ある項からある項への指示・参照を一方的に行うものであろう。テキストが生命のモデルとなる時、この「モデル」は、探求される生命と探求する科学とを第三項的に結び結ぶものだと解されているわけだ。しかし、「生命」にせよ「科学」にせよ、ここではどの項を取っても「テキスト」でありかつ同時に「テキストの産物」でもある。生物学のテキストを書く生物学者自身が、そして遺伝子というテキストを読む生物学者自身がまた生物であり「テキスト」なのだから。よってここにはもはやメタレベルに位置して外からテキストを読解しうる審級は存在しない。以上から、あくまで一方通行的なものとしての「モデル」としては、「テキスト」は不適格であるとされる。

ではどういう話になるのか。何か別のモデルを探せばよいのか。もちろんそうではなく、「モデル」という概念そのものの「内的な脱構築」(106頁)こそが問題となる。デリダはモデル概念を「生殖」という事態そのものに導入する。生命体は自己の遺伝子への参照によって他なる生命体=子を残し、その子もまた孫を生み出す。つまり生殖と

は「モデル」が入れ子的に次なる「モデル」を生み出す事態である。このように「モデル」概念を生殖という事態において考察してみれば、モデルとは自己を参照し、自己を生み出すものなのであるから、もはや生命の外に立って、考察対象としての生命と、考察主体としての科学者＝生命のあいだを一方通行的に繋ぐものではない。一方通行的な「モデル」概念から、自己参照的で入れ子的な「モデル」概念への移行。ここで著者は、生殖する生命が何らかのモデルを求めるのではなく、むしろ「モデルなる概念そのものが、生殖のモデルである」（105頁）という転換に立ち会う。「モデル」概念がこうして脱構築されて初めて、テキストにおいて生命を語ること、生命がテキストであることが正当に理解されるのだ。だから、端的に「生命とはテキストである」⁵と言うことはおそらく正しいのだが、著者の読解はその一見簡明なテーゼの背後に潜む、モデルの入れ子が無限に有限な仕方での生命の運動そのものであるという事態、めまいを覚えるようなただならぬこの事態を暴き出すものである。

注意しよう。生命および生殖という事態のただ中でモデルの入れ子性が語られるとき、「モデル」が意味するのは自閉的に充足したシステムではない。なぜならモデルは、自らを模するものとの関係によって、はじめてモデルとなるから。そしてモデルを模するものは、必ずやモデルの外部に開かれた何かをはらむ。そこで生物は、自らの外部に存するモデルを模することで成立するようなものではなく、かといって自らに自閉したものともなり得ない。モデルとそれを模するものの成立には、例えば有性生殖においては減数分裂という形で、つねにすでに選択が介入する。また生命維持という別の文脈から考えてみても、そこにはネグントロピーの取り込みという形で、選択という契機が必ずや介入する。生殖・生命維持において選択が行われる以上は、以前とはもはや同じではない何か、つまり差異が成立しているのでなければならないわけである。著者はこうしてデリダと共に、遺伝という一見もっとも強固に同一性が支配する領域においてさえ、生命が自ら作り出す差異を、そして外部への開かれを見るのである。

開かれの具体相としてのエネルギー論。第一部第一章・第三章のデリダ-フロイト論

続いて、生命における「開かれ」を別の角度から理解するものとして、第一部第一章・第三章のデリダ-フロイト論を見ていこう。第一章については、著者の結論から内容を外観するのがよい。「[……] 二つの欲動による緊張と放散のリズムが固有な死と、死への道のりとしての生を可能に、つまり生が時間において持続することを可能にする」（41頁）。ここでは『快原理の彼岸』における周知の欲動論が念頭にある。

5 次を参照。F. ヴィターレ「テキストと生物——生物学と脱構築のあいだのジャック・デリダ」（西山雄二・小川歩人訳）、『人文学報』512巻15号、首都大学東京人文科学研究科人文学報編集委員会、2016年、167-190頁。

有機体は二つの欲動、すなわち生の欲動と死の欲動とのあいだで揺れ動く。生の欲動は、生を「保つ」garderものである。そして死の欲動もまた、単に死のうとする欲動なのではなく、死を「保つ」ものであるとされる。ここで「生を保つ」とは、外的な死（事故死）によって死ぬのではなくするという、基本的な理解でよい。他方、「死を保つ」というときには、自らに固有な死をとっておくものだという、デリダに固有の「死の欲動」理解がある。ここで生の欲動はあくまで死の欲動に対して二次的なものとなる。デリダにとり、「固有な死を守り」つつ固有の死へと至ろうとする死の欲動のためにこそ、「偶然的な死から守る」生の欲動がある。生の時間とは固有の死に至るまでの、延期différerされ、引き延ばされた時間である。われわれは「死の欲動」が志向する固有な死へと直ちに至るのではなく、それに至るまでの間を保たせるように、「生の欲動」によって生き延びる。こうして考えられる生の時間は、二つの欲動のあいだに生じる。われわれは固有に死のうとしつつ、偶然的な死を生き延びようとするのだ。二つの欲動、「エネルギー」の「緊張」と「放散」は、押しては返す波のように、あるリズムにおいて動く。いやむしろこうした「リズム」からこそ、われわれの生の時間の経験が発生するのである。著者が着目するように、ア・プリオリな感性の形式としての時間を措定するのではなく、むしろリズムによる時間経験の発生を問う点で、フロイトにはカントに対する批判的視座があるのだ。ア・プリオリの発生というフッサールの問題圏は、フロイト読解においてもデリダを駆動している、ということだろう。

こうした結論を引き出すにあたって、著者はフロイトのテキストを直接訪ね、仔細な検証を行う。『科学的心理学草案』（1895）のフロイトは、上で述べていたような欲動の運動を、二種のエネルギー概念と三種のニューロンとによって実装されているものだと考えていた。エネルギーの放散と保持とは、エネルギーをそのまま通過させる ϕ ニューロンと抵抗つきの ψ ニューロンによって説明される。われわれはエネルギーを取り込み、脳のうちにとどめ、あるいは発散させる。そうしたエネルギーの備給と放散、そのリズムの調整に関わるニューロン、そういったものによって、われわれの心理的生活は成り立つ——現代的観点からはあまりに単純なものと見える、こうしたフロイトの脳-モデルの構築と、デリダのフロイト読解を理解するために、同著第二章が扱った「外部」の問題と接続しておこう。先に述べた通り、第二章の議論の要点は、「遺伝」という一見もっとも強固に「同一性」に支配された領域においてさえ、「差異」ないし「差延」が見出されること、そして自閉よりもむしろ開かれが見出されることであった。そして第一章では、栄養摂取や知覚・行動のためにみずからの外部に開かれつつ、個体の内部でのエネルギーのやりくり、すなわち家政=エコノミーを行う生命が問題となっている（35頁）。フロイトにおいては、外部のエネルギーの備給、そしてそのエネルギーの経済的な調整、その経済的な生命活動の生き延びのリズムが、ニューロンによって実装されるものとして思考されていたのである。

さらに同著第三章の「思弁する」論に移行しよう。「心的な刺激の緊張と放散のリズムを可能にするのが拘束であるといえる」(138頁)。デリダのフロイト読解を追跡する著者は、第一章で検討された「リズム」をそれとして可能にする「拘束」概念に突き当たる。さて、この「拘束」なる語は、デリダの『彼岸』読解において、その意義が興味深い仕方で多重化されている。フロイト自身はこの語を、放散する「自由エネルギー」を「固定」すること、エネルギーが放散されないように保つこと、という語義で用いていた。一方でラプラシユの精神分析的な『彼岸』読解によれば、フロイトの「自由エネルギー」周辺の混乱した用語法はプロイアーに対する無意識的な軽蔑の表れだということになるわけだが、他方でデリダは「拘束」概念に別の意義を見出す。デリダはエネルギーの「拘束」binden / 「解放」lösen という対概念の上に、「緩める」lösen 系の語素への注目から、問題の「未解決」ungelöst / 「解決」gelöst という対概念を重ね書きする。「解決を目指す」tendre vers la solution ことには、「緩むことの方へと緊張する」という意味が透かし見られる⁶。解決すること solution は緊張 tensions を緩めること résoudre であるが、そのためにまずは「障害のできるだけ近くに最大量のエネルギーを集め、結びつけ=拘束し、「ぴんと張る」こと」が必要なわけだ⁷。この考察はさらに、「拘束」という語によってなされた『彼岸』というテキストの行為遂行性をも明らかにする。一方でラプラシユとポンタリスによればフロイトの「拘束」概念の多義性は「未解決」な問題をそのままにするものだったわけだが、他方でデリダは「何かしらの結論にいたりそうになっても結論を出さずに、さらに別の問題を扱い、当初の問題を宙吊りにしようとする『彼岸』の叙述そのものに注目している」(137頁)。つまりデリダの『彼岸』読解においては、未解決問題をそのままにしながら別の問題へと移行する『彼岸』のテキストそのものが、未解決のままに=エネルギーを放散し切らないままに、別の問題へと移行する=エネルギーを取り集め緊張させるといふ、フロイト自身が示したいはずのエネルギー経済的な生=生死を体現するものと読解されているわけだ。

以上の考察を経て、第一部は次のように締め括られる——「このテキストの形式と内容の入れ子構造や行為遂行性に注目して生死について論じたのが、「思弁する」におけるデリダの『彼岸』読解の意義であろう」(139頁)。ここで著者は、フロイトの行為遂行性に立ち会う読解を展開するデリダのテキストに対して、「入れ子構造」という第一部第二章の帰結を接続しているわけだ。ここに至って、デリダのテキスト=生は、まさしく「入れ子状」のモデルであるような「生命、すなわち生死」という主題のもとで生きられたものとして読解される。さらにもう一步進んで、ここで著者自身のテク

6 J. Derrida, *La carte postale. De Socrate à Freud et au-delà*, Aubier-Flammarion, 1980, p.417.

7 *ibid.*

ストをも行為遂行的な観点から照らしてみれば、著者の読解のひとつの帰結はすでに明らかだろう——デリダのテキストの生き延び、そしてデリダのテキストのもとで生き延びているジャコブやポンジュやフロイトのテキストの生き延びはまた、読者の読解と読者のテキスト＝生の生き延びを、入れ子的に誘発するということだ。

デリダと「生の哲学」

せっかくなので、同書が触発する読解のひとつとして、ベルクソンの所謂「生の哲学」との接合の可能性を最後に提示してみたい（著者自身もまたその可能性を仄めかしている（254頁））。フロイトの同時代人でもあった哲学者ベルクソンの考察は、意外なほどに「生死」を主題とする本書第一部の射程と響き合うところがある。ベルクソンが『物質と記憶』第四章にて実在の深みに看取した「リズム」概念は、「持続」の「緊張」の度合いとして表現されるものであった。続く『創造的進化』では「持続」の考察は宇宙大に拡大され、持続する生の傾向性と、その弛緩として描かれる物質の傾向性という二方向性を軸とした生命論＝存在論が展開される。これらの二方向性の不可分な拮抗を表現する際、ここでもベルクソンは「リズム」の表現を用いる。生の傾向性は本質的に持続し、物質化の傾向に自らの「リズムを押し付けて」いて、そのことで物質化の傾向は生命の傾向と不可分なものである⁸。ベルクソンにおける持続する生とは、のっぺりとした時間的持続というイメージで表象されるべきではなく、むしろリズム的な構造を、内的緊張を、その只中にそれと分からぬままに内包されている要素の異質性を、有するものとして表象されるべきものだ（第一著作『意識に直接与えられたものについての試論』から一貫した論点である）。これらを踏まえるとき、ベルクソンの側からはデリダ・フロイトからの「生死」を一つの生命論＝存在論として展開する可能性を思い描くことができるし、デリダの側からはベルクソンの生命論におけるエネルギー経済的な側面、そしてそこから生の哲学者ベルクソンにおいて「死」と呼びうる主題を炙り出すことができるかもしれない。さらに、共に生命を扱った二人の哲学者が、生命を思考する際に最も深いところで依拠する発想にまで進めばどうなるだろうか。そこではおそらく、デリダにとっての起源とその抹消としてのエクリチュールという発想が、ベルクソンにとっての純粹記憶と習慣という対概念と突き合わされるだろう。どこまでも潜在的な純粹記憶と、純粹記憶によって成り立ちつつもあくまで現働的な平面で動き、みずからの起源を知らないかのように振る舞う習慣というあの対概念と。——いずれにせよ、デリダにおける「生命すなわち生死」という問題は、いまだ展開されるべき論点を豊富に内蔵しているにちがいない。この書物がいたるところでテキストの読解を触発することを祈りつつ、紙幅の都合からここで筆を擱く。

8 Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, PUF, 1907/2016, p.11.